The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ハンセン病と短歌 : 映画〈小島の春〉をめぐって
Author(s)	松岡, 秀明
Citation	Communication-Design. 2015, 12, p. 39-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51501
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ハンセン病と短歌
映画〈小島の春〉をめぐって

松岡秀明（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

Leprosy and Tanka
On *Kojima no Haru*, a movie released in 1940

Matsuoka, Hideaki（Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University）

1940年公開の映画〈小島の春〉は、国立癩療養所長島愛生園で癩の治療に携わった医師小川正子の手記『小島の春』（1938年刊）を原作とする商業映画で、癩を扱った映画として話題となり、『映画旬報』1940年度の優秀映画で第一位となった。この映画の特徴のひとつは、たびたび短歌がスーパーインポーズされることである。本稿は、まず1930年代後半から癩患者の文芸が評判になっていたこと、特に短歌が注目されていたことを検証する。次に、映画にしばしば現われる美しい風景とともに、小川正子と癩患者の短歌は、観る者を癩の現実から目を遠ざける作用をしていることを指摘する。

This paper explores a film entitled *Kojima no Haru* or Spring in the Island, released in 1940. Based on the best seller book of the same title by a female doctor who devoted herself to the care of leprosy patients, this film focuses on leprosy. One of the features of the film is superimposition of Tanka, a Japanese short poetry consisting thirty-one syllables. Literary works by leprosy patients began receiving public attention in the late 1930s. Featuring Tanka diverts the audiences' attention from the reality of the disease.

キーワード
ハンセン病、短歌、隔離
Leprosy, Tanka, Isolation

はじめに

日本におけるハンセン病については、医学はもちろん、社会学、歴史学などのさまざまな学的領域からアプローチがなされてきた。ハンセン病患者の手になる小説、短歌、俳句等々の文芸作品も現在比較的容易に読むことできるようになっており、それらについての研究も蓄積がある[1)]。

1938年に出版された『小島の春』は、癩の治療に携わった医師小川正子の手記である[2)]。『小島の春』は、著名人に絶賛されベストセラーとなり映画化されるに至る。1940年に公開された映画〈小島の春〉は、この小川の手記『小島の春』を原作とした癩を主題にした商業映画である（以下、小川の著書は『小島の春』、映画は〈小島の春〉と表記する）。この映画は大きな話題となり、『映画旬報』1940年度の優秀映画で第1位となった。荒井［1996：79］は、

こうした一連の出来事のなかで、小川が「女性的・キリスト教的ヒューマニズムの象徴、さらには救済的機能さえ付されて神話的存在」となっていったことを、「『小島の春』現象」と名づけている。この現象は、マスメディアの存在なしにはありえなかった事態である。

〈小島の春〉の特徴のひとつは、たびたび短歌がスーパーインポーズされることである。この映画については、これまでいくつかの研究がある[3)]。この映画で癩患者がどのように表象されているかを検討した石居［2010］は、短歌の挿入を「見る者の共感を誘う仕掛け」としての「表現上の特色」であると指摘している（石居［2010：157］）。一方、〈小島の春〉をさまざまな視点から詳細に分析した藤井［2002-3］は、この映画における短歌を、癩患者の「凶々しいまでの現前から目をそらせるコード化された心地よい代理物」（藤井［2003b：27］）と捉えている。しかし、石居も藤井も短歌についてはそれ以上の考察は加えてはおらず、この映画で重要な役割を果たしている短歌について十全に検討されてきたとは言い難い。

〈小島の春〉は、マスコミュニケーションとしての映画に、大衆文芸としての短歌がどのように用いられたか、そしてこの二つのジャンルは癩とどのようにかかわったかを検証する際の貴重な資料である。ベイトソン［1986：17］が指摘するように、映画は一人の作者が作りあげるものではなく、それを作る一群の人々によって創造される。本稿は、当時の短歌と癩の関係を導きの糸として、どのような力が働いてこの映画が出現したのか、この映画のなかで癩がどのように表象されているかを検討しつつ、この映画において短歌はどのような機能を果たしているかについて分析することを目的とする。

1. 「救癩の手記」としての『小島の春』

『小島の春』は、瀬戸内海の小島である岡山県の長島にある国立癩療養所長島愛生園に勤務していた女性医師小川正子（1902 ～ 1943）の手記である。小川は長島愛生園だけでなく、園長の光田健輔の命を受けて積極的に島外で検診を行ない、癩患者を発見すると長島愛生園への入園を促した[4)]。そして、小川は短歌を詠みキリスト教を信仰する人物であった[5)]。

1902年に山梨県に生まれた小川正子は、1918年甲府高等女学校卒業し20年に遠縁にあたる法務官僚と結婚する。しかし1923年には離婚し、翌24年に東京女子医学専門学校に入学して29年に卒業する。1932年6月から結核に罹患して山梨へ帰郷する1938年10月まで、医官として長島愛生園に勤務した。郷里で1943年4月29日結核のため亡くなっている[5)]。

1938年11月に長崎出版から刊行された『小島の春』は、光田の命を受けた小川が、各地で癩患者を見つけ出しては入園を促すとともに、癩についての啓蒙活動を行なう旅の記録である。そのなかに小川の自作の短歌が散りばめられており、歌日記とも呼べるようなテクストとなっている。初版第一刷は500部であったが、中山［1984：83］によれば、「当時の群

書を圧して220版、22万冊を数える」売れ行きを示した。この部数は、当時としては異例のベストセラーである。

『小島の春』の本文の前には写真や序文があるが、これらは重要な意味をもっている。まず、書名と著者名が記された頁をめくると、その裏、つまり右側のページには小川正子の光田健輔への謝辞、左側のページには長島愛生園の上司である園長の光田健輔の写真が掲載されている。背広を着てネクタイを締め穏やかな表情の光田の写真の下には、「光田長島愛生園長近照」と記されている。小川がいかに光田を尊敬していたかが、この2ページにはっきり示されている。

続く8ページに亘って、長島や小川が検診を行なった四国の風景等の写真15葉が掲載されている。これらの写真についての論考を含む別稿を準備しているので、以下の点だけを指摘しておきたい。患者が写っていることが明示されている写真は、「日向ボッコをする病者(長島にて)」というキャプションが付された一枚だけである。しかし、斜め後ろ姿が写る患者の表情は小さくてはっきりしない。このことは、後に検討する映画〈小島の春〉の構成とかかわっている。この写真以外に小学校での講演会の準備の写真1葉を除くと、残る13葉は美しい風景写真である。

続いて、高野六郎、下村海南、光田健輔の順で「序」が現われる。後に見るように、高野は当時の救癩運動で大きな役割を果たしており、下村も救癩運動に関心を持っていた。歌人でもあった下村は、『小島の春』の特徴を的確に指摘している。

> 僕は短歌の方に足を踏み入れてゐるからいふでは無いが、此作品は著者の血と汗と涙に滲んでる筆先に、歌が彩られてゐる事により、得もいはれぬ暖かな懐かしさ、或るなごやかな気分を味ひ得るは嬉しくもあり、有りがたいと思ふ（下村［1938：序 5］）。

たしかに、挿入されている短歌は癩についての記述を中和し、読後感をさわやかなものにする効果を持っている。後に検討するように、このことは映画でも継承されるのである。

新聞に掲載された知識人の次のような賞賛は、『小島の春』がベストセラーとなる後押しをしたと思われる。文芸評論家として当時大きな影響力を持っていた小林秀雄は、東京朝日新聞の1939年1月11日号掲載の書評で［1939］、『小島の春』を、嘘がない人間記録と評価し、「近年読んだ本のうちで、最も感銘の深いものであった」と絶賛している。

東大教授の皮膚科医で癩の研究を行なっていた太田正雄も、『小島の春』に感動した一人である。太田は、木下杢太郎のペンネームで創作や評論等の文芸活動を精力的に行なっていた人物でもある。日記によれば、太田は1939年2月12日甲府へ日帰りの講演に出かけた車中で『小島の春』を読んだ（木下［1980：169］）。後述する「癩文芸を語る」という座談会で、太田は『小島の春』を「読み乍ら涙が出て先が読み続けられな」くなり、それをまぎらわすため禁煙車と気づかず煙草を吸ってしまい、車掌に注意されたと語っている（阿部他［1939］166）。その後太田は、木下杢太郎名義で1939年3月20日の『東京日日新聞』の読

書欄に、『小島の春』を絶賛する評を寄せている（木下［1939］）。まず太田は、『小島の春』が「救癩手記」であるとする。太田は、癩根絶のためには調査、宣伝、治療が必要であると説き、『小島の春』は、「唯功利的の立場からいっても、この宣伝の功が満点に値している」と述べる。そして太田は、小川正子を「天稟と文体と倶に備はつた女詩人」と高く評価し、「救癩手記」であることを除いても、『小島の春』は「すばらしい田園文学」であるとも記している。

2. 昭和10年代前半における癩と短歌―改造社の果たした役割をめぐって

映画〈小島の春〉が制作された背景には、癩患者の手になる文芸―「癩文芸」と称される場合がある―についての関心が高まっていたという事実がある。川端康成が激賞した北條民雄の「いのちの初夜」が1936年（昭和11）に『文学界』2月号に発表され、第2回文学会賞を受賞したのを契機として、少なくとも文学者や文学に関心を持つ者の間で、癩患者による文芸が注目されるようになる。この、「癩文芸」ブームで、大きな役割を果たしたのが改造社である。

1919年に創業した改造社は、同年総合雑誌『改造』を創刊した出版社である。創業から1944年に軍部の圧力によって解散に追い込まれるまで（戦後、再び出版を行なうようになったが）、改造社は大きな社会的影響力を持った出版社だった。

では、改造社は癩患者の文芸にどのようにかかわってきたか。1937年、この出版社は明治以降の短歌による『新万葉集』全11巻の出版を企画し、短歌を募集した。一人20首までとするこの公募に対して、応募された短歌の総数は40万首にのぼるといわれる（村井［2012：266］。1938年1月に出版された『巻一』に、長島愛生苑の癩患者明石海人（1901～1939）の短歌が11首入選を果たした。この『巻一』には、明石以外にも数名の癩患者の短歌が収められている。

このことに対して太田正雄が、『短歌研究』の同年4月号に「新万葉集のうちの癩者の歌」というタイトルの評論を寄せている。1962年からは短歌研究社という出版社が発行しているが、『短歌研究』は1931年にやはり改造社が創刊した短歌専門の月刊誌である。現在、『短歌研究』の他に、『短歌』、『歌壇』、『短歌往来』等の短歌専門の月刊誌が出版されているが、この当時は結社を超えた短歌誌の『短歌研究』が歌人に大きな影響力を持っていた。この評論で、太田は『新万葉集 巻一』のなかの癩患者の短歌－特に明石のそれ－を紹介している。その後明石は、1939年3月23日改造社から歌集『白描』を出版し、岡野（［1993：492］）によれば25,000部のベストセラーとなる。明石は、『白描』出版後間もない同年6月9日に死去している。

太田正雄が『小島の春』を読んで間もない1939年2月24日－『白描』はまだ発売されていない－、癩予防協会主催で「癩文芸を語る」という座談会が銀座ニューグランドで開催され（成田［2004：213～4］）、太田も参加している。その記録は、『改造』1939年7月号に「癩文学を語る」というそのままのタイトルで掲載されている。この座談会の発言者の顔ぶれと発言内容は、癩患者と文芸の関係を考える際に重要である。

では、どのような人物がこの座談会に参加したか。出席者は五十音順に、阿部知二、内田守、太田正雄、小林秀雄、下村宏、本田一杉、高野六郎の7人で、いずれも当時癩に積極的にかかわっていたか、関心を持っていた。座長の下村宏（海南）（1875～1957）から簡単にその人となりを見ていくことにしよう。下村は当時貴族院議員で、癩に関心を持っていた。後に日本放送協会会長を経て終戦時には内閣情報局総裁として玉音放送にかかわった人物でもある。

司会役を務めた高野六郎（1884～1960）は北里柴三郎門下の医師であり、慶大教授、北里研究所所長等々を歴任した日本の予防医学界の重鎮である。そして高野は、日本の癩に対する政策、すなわち患者の絶対隔離に深くかかわっていた人物でもあった。東京帝大医学部を卒業後国立伝染病研究所に入所した高野は、この座談会当時厚生省予防衛生局局長を務めていた。1931年に発表した「癩の根絶」という論文で、癩予防法、国立療養所、癩予防協会によって癩を根絶することができるとする持論を展開している（高野［1931］）。1931年といえば、その8月1日から癩予防法が施行された年である。また、癩予防協会はこの年の1月21日に創立された団体である[6)]。

この座談会には、高野のほかに医師が3人の参加している。まず、太田正雄（1885～1945）だが、既に紹介している。二人目の医師は、内田守（雅号は守人（もりと））（1900～82）である。1920年に熊本医専を卒業した内田は、1924年熊本の九州診療所の眼科担当の医局員となる。1936年に長島愛生園に転じ、光田健輔の指導を受ける。短歌結社「水甕」に属し内田守人の名で短歌を発表していた内田は、癩患者に短歌を詠むことを奨励したが、それは後に見ていく。最後は、本田一杉（ほんだいっさん1894-1949）である。大阪在住の医師の本田は俳人でホトトギス同人であり、自ら俳句雑誌『鳴野（しぎの）』を出していた。本田は、各地の癩療養所で俳句指導を行なっていた。

文壇からは、阿部知二と小林秀雄の2人が出席している。先に引いたように、小林秀雄（1902～1983）は、『小島の春』を絶賛した。一方、阿部知二（1903～1973）は作家だけでなく英文学者としても知られる。1936年に出版した『冬の宿』が好評を博して、当時新進作家として知られるようになっていた。

座談会は、癩患者の小説、短歌、俳句についてだが、本稿では短歌について検討する。内田によれば（阿部他［1939：162］）、癩療養所で短歌が始まったのは1923～24年（大正12～13）である。この座談会の時点で、「各療養所に機関雑誌」があり、患者たちは「それに

依って勉強」している。そして「療養所で中央の雑誌に投稿して勉強して居る者が百人位」いるという[7)]。

なぜ短歌か、という問題をここで考えておきたい。短歌は、五七五七七とシラブルを続けていけばとりあえず形にはなる。そのため、それまで文章を書いたことがなかった人々でも、比較的容易に短歌を作ることができる。そして、療養所の短歌サークルに入れば友人もできる。結核療養所や癩療養所で、いわゆる「療養短歌」が広まったのは、短歌を作ることの簡単さと療養所内に同好の仲間ができることに拠るところが大きいと思われる。

ところで、この座談会に出席していた者のうち内田以外にも短歌を実際に作っていた者がいる。太田正雄が木下杢太郎のペンネームを用いて行なっていた創作活動の中心は詩や戯曲だが、短歌もつくってはいる。高野六郎も、短歌を詠んだ。没後の1961年に内田守が編集し出版された『高野六郎歌集』がある（高野［1961］）。また、明石の歌集『白描』には、松籟という題で短歌2首が収められているが、その詞書に「内務省衛生局予防課長として、歌集『銀の芽』の歌人として我等に親しき高野六郎氏」とある（明石 1939：81）[8)]。そして、内田［1938：215］によれば、「癩院の短歌運動で一番早い」ものは1915年頃高野六郎が、「東京の目黒の慰疾園（私立）で一人で女患者に短歌を指導された事」であるという[9)]。高野はその後、「癩院の短歌並に一般文芸運動に非常に意義を感じ…熱心に声援」した。そのため、「癩院から出る歌集には殆ど先生の序文を見ないものは無い程である」という（内田 1938：215）。

下村も積極的に短歌にかかわっていた。1915年に佐佐木信綱が主催する短歌結社の竹柏会心の花に入った下村は、歌人としても知られており、下村海南の名で5冊の歌集を遺している。『芭蕉の葉蔭』（1921）、『天地』（1929）、『白雲集』（1934）、『蘇鉄』（1945）、『歌歴』（1959 没後出版）がそれである[10)]。すなわち、この座談会の出席者7人中4人がなんらかの形で短歌にかかわっていたのである。

さて、座談会ではまず司会の高野が、この座談会は「一方には癩患者に力を添へ、一方には世間の人が癩に関する関心を成るたけ新鮮ならしめたいといふやうな考」えにもとづいていると挨拶している（阿部他［1939：160］）。続いて、高野に促され最年長の下村が話を始める。下村は、療養所の患者たちに、「短歌や俳句に依つて先づ心の治療」をする、と語り、患者たちは「文芸といふことで非常な慰安を得て居るに相違ないと思ふ」と続けている（阿部他［1939：160］）。さらに下村は、明石海人らの歌人が現われ、患者の手になる小説も「主だった雑誌」に掲載されるようになった、と述べる。短歌では、『新万葉集』に少なくとも56人の癩患者が入選している。このような状況を踏まえて、内田は、「只今は療養の短歌というふものは脂が乗り切つて居る所であります」と主張するのである（阿部他［1939：162］）。

下村は、さらに、『小島の春』が出版されたことに触れ、癩に対する「世間の関心も非常に多くなって居る時だと思ひます」とも述べている（阿部他［1939：160］）。この癩につい

ての世間の関心に関連して、阿部知二が興味深い発言をしている

> 実は昨日も或る映画会社の人と会って話したのですが、この頃どういうものを作ったらアッピールするだろうという時に、そこの宣伝部の人ですが、ヒューマニスチックの方なら間違ないということを言つて居つた（阿部他［1939：163～4］。

座談会の流れから考えると、阿部は癩の映画化についての可能性について語っている。阿部がどの映画会社の宣伝部長と会ったかは不明だが、癩というおおよそ映画で扱うこと容易ではないテーマも、「ヒューマニスチック」なアプローチをすれば扱いうると考えていた映画人がいたことを伺うことができる。そして、この座談会から1年半を経ずして癩を主題とする最初の日本映画〈小島の春〉が公開された。すなわち、この映画は、これまで見てきたように癩に直接あるいは間接にかかわってきた有力者がマスメディアで発言的にこの病気ついて発言するようになったという時代の流れのなかに出現したのである。

3. 〈小島の春〉のレトリック

〈小島の春〉は、1940年7月31日に封切られた。制作会社は東京発声映画、配給は東宝が行なった。出演者は、主演の小山先生に夏川静江、癩患者横川に菅井一郎、横川の妻に杉村春子である。杉村は一人二役で、桃畑の一軒家に住む癩患者の女の役もこなしている。また、子役時代の中村メイ子がキヨ子を演じている。監督は、小説を原作とした映画を数多く監督したことで知られる豊田四郎（1906～1977）、 脚本は八木保太郎（1903～1987）が書いた。

『日本医事新報』は、1940年8月15日号の「新映画評」で3ページに亘って〈小島の春〉を取り上げた。執筆者は〈癩文芸を語る〉に参加していた太田正雄、高野六郎の二人の他、長島愛生園園長の光田健輔、東京女子医専校長の吉岡彌生、女性医師の団体である日之出会の会員多川澄子のあわせて5名で、水原秋桜子が「映画『小島の春』を見て」という題で俳句3句を寄せている。

日記によれば、太田は1940年7月26日、公開に先立って試写会で映画〈小島の春〉を見ている。

> 午後五時日本医事新報記者たづね来り、一緒に出て（中略）厚生省主催の「小島の春」を見にゆく。（七時開催）産業会館。出来甚だよろし。即ち原作の故なり。又配景も佳なり。（中略）依頼による「小島の春」の感興を書く（木下 1980：384-5）。

ここで注意しなければならないのは、「厚生省主催の『小島の春』」という文言である。厚生省主催で上映会が開かれ、東大医学部教授で癩を研究していた太田が招かれ、さらに『日本医事新報』に評を書くことが決まっていたのである。『日本医事新報』は、1921年に創刊さ

れ現在に至るまで発行されている週刊誌で、読者としては医師を想定している。すなわち、太田にはこの映画の宣伝すること、否それ以上に医師に対して癩の啓蒙を行なうことが期待されていたのである。

太田が書いたのは、しかし、必ずしも期待されたような趣旨の文ではない。『日本医事新報』に寄せた映画評で、太田は当時の癩についての認識を批判しているからである（[1940：57]）。太田は、癩が不治と考えられていることで、「患者の間にも、それを看護する医師の間にも、それを管理する有司の間にも感傷主義が溢れ漲っている」と批判する。にもかかわらず、太田は〈小島の春〉を高く評価する。太田は、小川正子の原作の良さが監督、脚本家、出演者に影響したとし、それゆえに映画の「初からしまひまで作者の魂に直面しているのであると云つて可い位だ」と述べるのである。そのうえで太田は、〈小島の春〉が「徹頭徹尾あきらめの動画」であるとし、「此の感傷主義が世に貽つた最上の芸術である」とアイロニカルに語るのである（太田［1940：58］）。（太田［1940］1982：190～1）。

一方、7月31日に日本劇場でこの映画を観た映画評論家の友田純一郎は、『キネマ旬報』9月11日号に寄せたこの映画の評の末尾の「興行価値」と題された欄に、次のように記している。

> 感銘価値豊富。東発作品中営業的に最も期待されるものであり、東京では各館で続映された（友田［1966［1940］：82］）。

〈小島の春〉は批評家には好評で、『映画旬報』（『キネマ旬報』の後継誌）の年間ベストテンで一位を獲得するのである。

しかし、原作がベストセラーとなっていたからとはいえ、当時癩をテーマとした映画を制作するのは容易ではなかったと考えられる。〈小島の春〉封切り直前の1940年7月24日の『東京朝日新聞』に、Qこと津村秀夫は次のように書いている。

> 二、三年前迄の日本映画界の興行常識では癩病患者の続々出る映画などを企画する者は狂人扱ひされたであらう（津村［1940］）。

では、映画を製作する側は癩の映画化についてどのように考えていたのだろうか。脚本を書いた八木保太郎は、〈小島の春〉が公開されてから26年後の1966年に次のように述懐していている。

> 原作は、劇的要素の全くない随筆であった。それを、どうドラマチックなものにするか。それと、レプラを扱うということに対する、一種の生理的な反発みたいなものを、どう処理するか。それが、問題であった。どだい、それまでの常識からいっても、映画にしようなどと考えられる素材ではなかったのである。
>
> そこで、短歌を使った。ドラマ的にも、また、生理的反発を避けるためにも、これは有効な手段だったと思っている（八木［1966：63］）。

〈小島の春〉は短歌以外にも、観る者の「生理的反発」を回避する方策を二つとっており、

まずそれから検討してみよう。一つめは、藤井（2003：38）が「患者の姿を見せずに済ませる」と表現するような手法である。すなわち、この映画は一見して癩患者と分かる人物を登場させていない。

この映画には少なくとも5人の癩患者が登場する。その5人とは、南島金浦集落に住む横川（準主役）、金浦集落の老人、金浦集落の宮田の息子五作、白砂島の桃畑の女、土佐のある村の名門堀口家の娘雪子である。横川は、村長によればこの村で「一番病気が重い」のだが、サングラスと軽い歩行障害が示されるのみである。金浦集落の祈祷所の老人は黒い帽子を被っており、横顔と背後の姿だけが現われる。また、桃畑の女は顔を明らかにせず、宮田の息子は頭と手足に包帯を捲き松葉杖をついた姿が横からのショットで示されるに過ぎない。そして堀口の娘雪子も、薄暗い土蔵のなかでその姿がはっきりせず、横顔で眼と鼻と頬が一瞬現われるものの表情は読み取れない。この映画を観た高野六郎は、変形した顔や手足の映像が現われないことをよしとして、次のように述べている。

> 画面には癩の深刻な形貌は殆ど出て来ない。顔をそむけなくともよい程度の軽症患者と面をあらはに出さない重い患者の身体の一部が時々示されるに過ぎない。（中略）癩の映画でありながら、…癩の陰惨さを余りしつこくは感じせしめない用意が行き届いて居る（高野［1940：58］）。

もう一方の方策とは、美しい風景を多用することである。先に引用した太田の日記にも、「配景も佳なり」と書かれている。このレトリックは、小川の著作『小島の春』でも用いられているものである。第1節で示したように、『小島の春』の巻頭に掲げられている15葉の写真のうち13葉は美しい風景の写真なのである。

すなわち、これらの方策とは、醜いと感じられるものの映像の使用を可能な限り少なくすること、美しいと感じられるものの映像を可能な限り多くすることである。では、この映画で短歌はどのような役割を果たしているだろうか。

4. 短歌というフィルター

癩患者と短歌のかかわりを考えるとき、まず検討しなければならないのが、貞明皇太后（大正天皇の妃）の次の短歌である。

> つれづれの友となりても慰めよ行くことかたきわれにかはりて

この歌は、1932年11月10日大宮御所で開かれた歌会で詠まれた（n.d.［1932：ページ番号なし］）。歌の意味するところは、行くことができない私の代わりに患者の友となって所在ない彼らを慰めよ、である。この歌会の兼題は「癩患者を慰めて」だった。時代を考えれば、御所の歌会でこのような兼題が選ばれたことに対して、出詠した45人のなかには驚いた者も少

なからずあったと思われる。この歌は、隔離を意味する救癩運動にかんするさまざまな文章に引用されるようになり、結果として癩救済運動のなかで大きな意味を担うことになる。

たとえば内田（[1938：214]）は、皇太后がこの歌を「御下賜遊ばされたので、患者の感激は言語に絶し、一般人士の救癩精神を鼓舞し」とする。そして、「患者の感激」は、癩予防協会がこの歌の下賜5周年を記念し、全国から募集した奉答歌と職員の奉答歌、すなわち「病人みとり人らの感激を新にしてよみ出でつる歌の数々」を集めて編んだ歌集『楓の落葉』のなかに看て取ることができる（[1937：ページ番号なし]）。

この歌集の巻頭を飾るのは、明石海人の次の歌である。

みめぐみは言はまくかしこ日の本の癩者と生れわれ悔ゆるなし

この歌が表しているのは、自己肯定とともに、癩にかかわる医療従事者の営為の肯定、すなわち最終的には隔離政策の肯定である。荒井（[2011]）は、この皇太后の御歌は、癩隔離政策を行なう者の正当性を担保していると指摘する。たしかに、自ら癩患者を「なぐさめ」に行くことのできない皇太后の代わりに彼らを「なぐさめ」るのは、癩にかかわる医療従事者ら救癩政策を行なう者たちなのだから。

大宮御所で開かれたこの歌会には、これとは別に重要な意味がある。それは、この歌会が、天皇家と癩患者たちの共同性を形成する契機となったことである。先に示したように、兼題は「癩患者を慰めて」である。皇太后をはじめ皇族や貴族が、癩患者という社会のマージナルな存在を視野に入れているのだと表明しているのである。内田（[1940：221]）は、次のように述べる。

家を追はれ社会と絶縁されてゐる彼等の、精神的に生きる道は全く塞がれてゐたが、文芸作品に依る社会との交歓は、漸く彼らに残されたる唯一の精神的更生の纜である。

究極の社会との交歓は皇太后のこの歌にこたえることであり、その意思が『楓の落葉』に結実した。

話を〈小島の春〉へと戻そう。この映画に現われる短歌は、小川正子が詠んだもの（映画の数カ所に現われる）、観客は癩患者雪子作ととらえるもの（小山先生が雪子と面会する場面に現われる）、明石海人が詠んだもの（長島愛生園を写したシーンで現われ、音読される）である。小山先生という救癩政策（＝隔離政策）を行なう者と癩患者という隔離されている者（明石海人）、あるいは隔離されるべき者（雪子）は、短歌を詠むという点で同じ地平にたっているのだ。そして、映画に現われる癩患者である明石海人の短歌は、次のような感傷的なものが選ばれ、実際の長島愛生園の映像にスーパーインポーズされることによって、ドラマタイズされるのである。

盲ひてはおのれが手にはつくらねど庭のトマトの伸びをたのしむ

わが骨の帰るべき日を嘆くらむ妻子等をおもふ夕凪ひととき

一首めは初句に失明という当時の患者に起こりうる事態が詠まれているが、二句め以降は和

やかな光景が描かれる。二首めは生きて妻子に会うことはないという諦観が、抑制されたトーンで示される。このような現実を淡々と詠んだ短歌を挿入することが、八木の言う「ドラマ的にも、また、生理的反発を避けるためにも、…有効な手段」である短歌の用法なのである。

太田（1940：57）は、この映画を観るものは「初めのうちは癩問題と云ふ事を意識するが、やがてそれは忘れてしまふ。『詩』の伴奏の下に活動し、揺曳する或る魂に参通するばかりである」と述べている。なるほど、短歌が挿入されることによって隔離する側と隔離される側の境界が曖昧になり、観る者は小山先生の純粋な行為―言うまでもないが、著者はそれを是としない―に魅了されるようにこの映画はつくられているのである。

結論

周知のように、日本の近代化とともにコミュニケーションのあり方は大きく変化した。本稿で扱った二つのジャンル、映画と短歌について簡単に触れておこう。日本で日本人によってつくられた映画は、それが初めて公開された1899年以来、順調に発達し大衆芸術としての位置を確かなものにしていった。

一方、短歌も大きく変容した。マスメディアの出現によって、それまで狭い範囲でしか流通していなかった短歌は多くの作者や読者を獲得するにいたる。松岡［2011］が指摘するように、1886年創刊の月刊誌『大八洲学会誌』の短歌投稿欄には全国各地から歌が寄せられたし、佐々木信綱が主催する竹柏会が1898年に創刊した日本で最初の月刊短歌結社誌『こころの華』にも、やはり全国から短歌が投稿された。この二つの活版印刷の雑誌が全国的に流通した背景には、新たなコミュニケーションの様式として導入された郵便制度が確立したことがある。

他方、1899年、正岡子規は、かつて自ら記者として活躍した新聞の『日本』誌上に投稿短歌欄を設けた。その後、石川啄木を選者とした朝日歌壇が1910年に始まり、いわゆる新聞歌壇が確立されるにいたる。郵便制度の確立や印刷技術の進歩に伴って出現したマスメディアによって短歌は大衆化されていった。それとともに、詠まれる対象も花鳥風月から生活全般へ拡大し、そのなかには病気も含まれるようになった。そして、療養短歌、すなわち癩や結核の療養所で患者たちが詠む短歌というジャンルが確立されたのである。

〈小島の春〉は、癩をテーマにした商業映画など想像もつかなかった時期に突如として出現した訳ではない。上述の商業映画の発展、短歌の大衆化と療養短歌の確立というコミュニケーションの変容のなか、1936年頃からの「癩文芸」ブーム、1938年に出版された『小島の春』がベストセラーとなったこと、そして国策としての「救癩」を啓蒙するという気運を背景として、この映画は出現したのである。

〈小島の春〉において、しかし、癩はその症状としての変形した顔や手足はスクリーンに現われない。そうではなく、社会から孤立した存在としての患者、長島愛生園のような療養所において救済される存在として表象されているのである。

1936年11月に結成された超結社の歌人団体である大日本歌人協会が1940年2月に出版した『紀元二千六百年奉祝歌集』には、内田守人の次の歌が収められている。

　　み恵みにもれし癩者のなほありと我は叫ばむこの年にして（大日本歌人協会：12）

「この年」とは、言うまでもなく紀元2600年つまり1940年を指している。そして「み恵み」とは国家からの救済、すなわち癩療養所に収容されることである。この救済は隔離する側と隔離される側の共同性にもとづいたものであり、その共同性を示すのが短歌なのである。そして、この共同性は〈小島の春〉にも貫かれている。

付記

本稿は、慶応義塾大学人類学研究会（2013年12月17日）、および医療・文化・社会研究会（2014年10月15日）における発表にもとづいている。すべての関係者に感謝するが、とりわけ鈴木正崇、宮坂敬造、鈴木晃仁の各氏の厳しく暖かいコメントに深謝したい。

注

1）ハンセン病患者の文芸作品をまとめたものに、『ハンセン病文学全集』全10巻（皓星社、2002～）がある。また、ハンセン病患者の手になる文芸作品の研究としては、たとえば、大内［2008］、荒井［2011］がある。

2）ハンセン病のかつて呼称である「癩」が、極めてネガティブなコノテーションを持っていたことは言うまでもない。そして、この疾患の名がハンセン病と改められたのは第2次世界大戦後の患者たちの運動の成果である。しかし、本稿が分析するのは小川の手記『小島の春』とそれを原作とする映画〈小島の春〉であり、以降敢えて「癩」という言葉を用いる。なぜなら、ハンセン病と呼び換えることによって、当時のそのようなコノテーションが捨象されてしまうからである。

3）藤井［2002～2003］、杉浦［2004］、石井［2010］など。

4）光田健輔（1876-1964）は、日本の癩治療に大きな足跡を残した医師で、1931年長島愛生園園長の初代園長となり1957年までの長きに亘ってその職を務めた。現在、その業績に対しては毀誉褒貶相半ばする。

5）小川正子については、清水［1986］、山下［2003］を参照にした。

6）ちなみに、癩予防協会は1952年に高松宮宣仁を総裁とする財団法人藤楓協会となるが、この協会の設立にあたって初代理事長になったのが高野である。

7）コンテクストから判断すると、内田の言う「中央の雑誌」は結社誌を指している。

8）この高野の歌集『銀の芽』は不詳。

9）正しくは「慰廃園」である。

10）当時から現在にいたるまで、短歌結社はその会員に配布する結社名と同名の結社誌を発行している。1939年当時の結社には、下村宏（海南）が参加していた佐佐木信綱率いる〈心の花〉、斎藤茂吉が席を置いた〈アララギ〉などがあった。

引用文献

阿部知二、小林秀雄、太田正雄、下村宏、本田一杉、高野六郎、内田守（座談会）（1939）「癩文芸を語る」『改造』21（7）：160-169

明石海人（1939）『白描』改造社

青木文象（1940）「『小島の春』と短歌の世界」『映画評論』22（8）：59～63

荒井裕樹（2011）『隔離の文学―ハンセン病療養所の自己表現史』書肆アルス

ベイトソン、グレゴリー（1986）『大衆プロパガンダ映画の誕生』御茶ノ水書房

藤井仁子（2002a）「可視と不可視のポリティクス―映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象（1）」『UP』No.361：17～21

藤井仁子（2002b）「可視と不可視のポリティクス―映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象（2）」『UP』No.362：13～17

藤井仁子（2003a）「可視と不可視のポリティクス―映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象（3）」『UP』No.363：37～41

藤井仁子（2003b）「可視と不可視のポリティクス―映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象（4）」『UP』No.364：25～29

藤井仁子（2003c）「可視と不可視のポリティクス―映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象（5）」『UP』No.365：26～30

藤井仁子（2003d）「可視と不可視のポリティクス―映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象（6）」『UP』No.366：17～21

石居人也（2010）「ハンセン病表象としての映画『小島の春』」黒川みどり（編）『近代日本の他者と向き合う』解放出版社：148-173

小林秀雄（1939）「『小島の春』」東京朝日新聞1月11日号

木下杢太郎（1939）「小川正子著『小島の春』」『東京日日新聞』3月20日号

木下杢太郎（1940）「動画『小島の春』」『日本医事新報』第935号（8月10日発行）：57～58

木下杢太郎（1980）『木下杢太郎日記　第4』岩波書店

松岡秀明（2011）「『こころの華』第一巻と歌にかかわる当時のメディア」『国際経営・文化研究』16（1）：106-91

光田健輔（1939）「明石海人の印象」『短歌研究』8（8）：156-157

村井紀（2012）「明石海人の“闘争”」村井紀編『明石海人歌集』岩波書店：265～309
n. d.（1932）『昭和七年十一月十日御歌会御兼題詠歌集』癩予防協会
小川正子（1938）『小島の春』長崎書店
岡野久代（1993）「明石海人年譜」『海人全集　別巻』皓星社：468～493
太田正雄（1938）「新万葉集」『短歌研究』7（4）：260-262
大内都（2008）「戦中期の「皇恩」とハンセン病者の文芸―序説」三宅晶子（編）『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第156集『身体・文化・政治』』：23～40
中山良馬（1984）「『小島の春』出版の頃」西坂保治、河本哲夫，秋山憲兄（編）『日本キリスト教出版史夜話』新教出版社：83-85
成田稔（2004）『ユマニテの人－木下杢太郎とハンセン病』日本医事新報社
Q（津村秀夫）（1940）「小島の春」『東京朝日新聞』7月24日
清水威（1986）『小川正子と『小島の春』』長崎書店
癩予防協会（編）（1937）『楓の落ち葉』癩予防協会
下村海南（1938）「序」小川正子『小島の春』長崎書店：序5～序6
杉浦晋（2004）「『小島の春』試論―手記と映画をめぐる場の編成」『埼玉大学紀要』39（2）：1-14
高野六郎（1931）「癩の根絶」『公衆衛生』49（8）：41～50
高野六郎（1940）「『小島の春』評」『日本医事新報』第935号（8月10日発行）：58
高野六郎（1961）『高野六郎歌集』新星書房
友田純一郎（1966［1939］）「小島の春」『キネマ旬報別冊　日本映画シナリオ古典全集5』キネマ旬報社：82-83
内田守人（1938）「癩短歌の昔と今」『短歌研究』7（9）：214-219
内田守人（1940）『療養短歌読本』白十字会
八木保太郎（1966）「若さの一つの記念」『日本映画シナリオ古典全集　第5巻』キネマ旬報社：63
山下多恵子（2003）『海の蠍』未知谷